

平成26年度研究成果報告書

都道府県・指定都市番号	34	都道府県・指定都市名	広島県	研究課題番号・校種名	5 (4) 小学校
				領域名	ESD
研究課題	<p>新学習指導要領の実施を踏まえた、学校全体での教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究</p> <p>(4) ESDを学校全体で体系的に推進するために、各教科等の連携により、持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を児童生徒に身に付けさせるための指導方法等に関する実践研究</p>				
学校名 (児童生徒数)	<small>ひろしまだいがくふぞくしののめしょうがっこう</small> 広島大学附属東雲小学校 (482人)				
所在地 (電話番号)	082-890-5111				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://www.hiroshima-u.ac.jp/shino/introduction/primary/				
研究のキーワード	<ul style="list-style-type: none"> ・共生社会 ・評言 ・学びのつながり ・相互依存 ・社会意識 				
研究成果のポイント	<p>○本校の課題を基に「共生」や「共生社会」の概念を規定し、共生社会を担うために必要な資質、能力を分析・検討して構造化することができたこと。</p> <p>○既存のカリキュラムにおける宿泊学習、集団活動の焦点を当てて規定した共生概念を基に集団活動を類型化するとともに、そのねらいを児童に育むべき資質能力の観点で分類、整理できたこと。</p> <p>○共生概念の習得や共生社会を担う資質能力を育む授業開発、実践ができたこと。</p> <p>○授業内での児童の共生意識を育む手立てとして「評言」と「意味づけ」に焦点化できたこと。</p> <p>○共生という観点から、本校の課題を明確にして全教員で共通確認できたこと。</p>				

1 研究主題等

(1) 研究主題

共生社会を担う子どもを育てる ESD の創造
～異なる価値観に気づき、互いを認め合う子どもの育成をめざして～

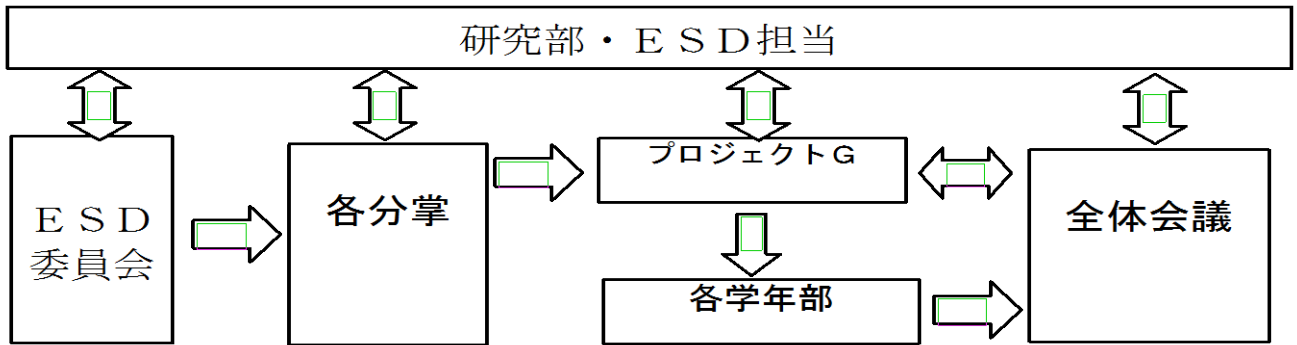
(2) 研究主題設定の理由

本研究は、持続可能な社会づくりに不可欠な共生意識を高める学習活動の在り方を探ることを目的として本研究主題を設定した。

本校では、これまでに学級の枠や学年の枠を外した縦割りグループによる「縦割り活動」を30年以上続けている。また、本校には単式学級・複式学級・特別支援学級があり、この学級枠を外して、児童が週に一度集まって、学校行事や宿泊学習の準備、簡単なゲーム等を行う早朝活動を行っている。その結果、学級形態の異なる学級や他学年間では、互いを認めることができるようになってきている。一方、同じ学級内では個人個人の考えの違いや価値観の多様性を認めることができていない現状もある。そこ

で、これまでの本校の取り組みや実態を鑑み、研究テーマとして「共生」を取り上げ、共生社会を担う子どもを育てるESDの創造に取り組むこととした。

(3) 研究体制



(4) 2年間の主な取組

平成 25 年度	<p>研究部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校全体の「共生」の目標設定 ・研究推進計画の作成 校内研修 ・ESDの理念, 先行事例に関する研修 ・研究推進計画を職員で検討, 確認 <p>学年部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「共生」を切り口に取り組んだ先行事例を参考に各学年の目標を再検討・再設定 ・「共生」をフィルターに学習活動を見直し, 整理 ・各学年の目標, 学習活動を交流, 修正 <p>公開研究授業 (図画工作科)</p> <p>学年部会 9~1月のデータを整理</p> <p>研究部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年次の成果と課題を踏まえて2年次の研究計画再検討 ・2年次の研究計画を検討・確認
平成 26 年度	<p>研究部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年次の研究推進計画の検討 ・リストアップした学習内容の整理 校内研修 ・担当教科をまたがって, リストアップした学習内容の交流 ・研究推進計画を職員で検討, 確認 <p>学年部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「共生」をフィルターに学習活動を再検討, 再構築 ・学習を実施, データの収集 ・共生をフィルターに洗い出した学習内容の整理 <p>校内研修</p> <ul style="list-style-type: none"> ・洗い出した学習内容で, 各学年つながるところがないか適宜検討していく。 <p>学年部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習を実施して, データを整理していく。 <p>研究部会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究成果を整理 研究紀要の作成 <p>校内研修</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年間のデータを整理して共生を柱とした学習過程の検討, 作成

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

共生は、国際化が進むこの地球規模の社会で、人が人として生きるための重要なキーワードとなる。現在、環境問題が大きく取り上げられているように自然の中で人を含む多様な種が共存することの重要性が言われている。また、インターネットやメディアを通じ様々な情報にふれ、交通機関の発達に伴い、直接多様な異なる文化を知る機会も増えている。これからのグローバル化社会の中で自分が自分らしく生きるためにも「共生」を柱とした教育は重要であると考えている。

以上の点を踏まえ、本校の実態を鑑みた上で研究内容を以下の五つのポイントに絞った。

- ①互いに高め合う「協力」関係と「競争」関係に着目した東雲小の共生概念（共生社会、共生関係）の設定。
- ②児童の共生関係を育む上での資質や態度、理解に関する観点の設定（その構造化、明確化）。
- ③学校行事等の集団活動における設定した資質や態度、能力を踏まえたねらいの検討（改善、系統性）。
- ④クラス内での活動における設定した資質や態度、能力を育むための授業開発。
- ⑤児童をとらえる見方・考え方を広げるだけでなく、児童同士の相互理解、児童のコミュニケーションスキルにもつながる、児童の共生関係を育む教師の手立てとしての「意味づけ」と「評言」の実践（学校行事などの集団活動やクラスの授業で実施）。

(2) 具体的な研究活動

- ①既存カリキュラムにおける集団活動の共生意識、相互依存関係という視点をフィルターにしてそのねらいを見直し検討、整理、改善する取組。
 - ESDカリキュラム作成に向けての取組
 - ・全職員で共生社会を生きるうえで必要な資質や能力を育む上での集団活動の系統性の検討と共通確認。
 - ・ESD委員会で系統性やどの活動でどの資質や態度、認識を重視するか検討。
 - ・各分掌で提案する学校行事、集団活動のねらいを検討、必要であれば改善し、その考えた内容を文章にまとめ、校内研修で全体に説明。
 - ・カリキュラム作成に向けて、教務部提案、児童部提案、保体部提案の3つのプロジェクトグループに分かれてESDカリキュラムの試案を作成。8月の全体会でそれぞれのグループで作成した試案を基に全体で話し合っけて検討して試案を完成。
 - 試案完成後、学校行事はこの試案のめあてを常に意識してねらい、内容を定め教育活動を行った。
 - 学年部でもこのカリキュラムや、後述する評言、意味づけを意識した教育活動の具体や計画について検討。
- ②評言・意味づけに関する取組
 - ・夏休みに外部講師を招聘して評言、意味づけに関する校内研修。
 - ・給食交流、朝の会・帰りの会検討会、座談会などで評言、意味づけを意識した意見交流、研修。
- ③共生意識を育むことをねらいとした授業開発、研究について
 - ・図工科で、養護学級と複式学級が同じ教室、時間、教材で授業を行った。その後協議会を開き、授業内容、方法について意見交換を行った。

④自主的な授業公開

3 研究の成果と課題

(1) 成果

E S Dの理念や共生概念，評言や意味づけの意義に関する研修会，共生に着目した実践校の取り組みに関する研修を行い，教員間の共生やE S Dに関する共通認識を図ることを徹底するとともに，単発ではあるが授業開発研究を複数の教科に渡って行い，授業分析・討議をすることができた。

また，各分掌，各学年部において「共生」をフィルターとして，集団活動等の目標に関する見直しを行うとともに，定期的に行う「生活・心座談会」において，取り組みに対する児童の変容や指導の難しさなど話し合い，児童の指導上の評言や意味づけの重要性や方法などを検討することができた。

これまでも本校では，3つの学級編成（単式・複式・養護）を生かし，児童相互は関わり合えるよう，様々な集団形態での活動を学校行事を中心に行ってきた。しかし，昨年度，今回の研究を始めるにあたって，その成果が学級内に生かされていないことが課題として挙げられた。それを改善すべくこの度国際政治学の「相互依存理論」をベースに，児童間に互いが高め合い支え合える競争・協力関係を本校の共生と定義し，本校における共生社会の実現を目指すため，今年度はその手立てを吟味し教員間の基盤形成に力点を置いて2年間研究を継続してきた。

その結果，学校行事などで行われてきた本校の特色を生かした集団活動を「共生」をフィルターにカリキュラムや目標設定の観点から再検討するとともに，学級内での児童の共生関係を築く手立てとして授業に着目し，複数の教科でそれを育む授業を開発できた。

今後は，今年度の研究成果を生かすとともに，さらなる分析を重ね，来年度の全学級実施につなげていきたい。

(2) 課題

課題としては，以下の3点があげられる。

- ①今後，今回の研究で得た知見やカリキュラムの継承や風化させない方法について検討する。
- ②共生社会を担う人材育成につながる授業開発・実践を継続していく。
- ③教師の「意味づけ」・「評言」の意識強化と学校教育活動における実践の継続。

特に「意味づけ」については全教員ができているものの，「評言」については，自信をもって「できた」といえる教員は少ない。その理由としては，肯定的な形で児童に論したり，考えさせたりするところが難しいと感じていることがあげられる。今回の校内研修で学んだことをもとに「評言」に関しては，引き続き意識して実践していきたい。

(3) 指定期間終了後の取組

今後も共生社会を担う人材として児童に育むべき資質・能力の観点やその系統性を踏まえ，本校既存カリキュラムにおける集団活動のねらいを再検討し作成した新たなねらいの基，今後もカリキュラムを実行していく。

今回見直した学校行事や集団的活動のねらいや活動内容を実践していくことで，共生社会を担うための資質，能力を持続的に育成していく。さらに次なる目標は，異文化理解のみならず自国内の相違，または同学年，同学級の身近な小さな差異の理解に注目した学校行事，集団的活動の取り組み，授業づくりを今後も促進していくことで

ある。